

『或る男、其姉の死』の成熟-志賀直哉における母と子の観点から-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富沢, 成實 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8133

『或る男、其姉の死』の成熟

——志賀直哉における母と子の観点から——

富澤成實

1

志賀直哉の文壇デビューは、周知のとおり、明治四三年四月発行の『白樺』創刊号への『網走まで』の発表による。このとき彼は、満年齢で二七歳であった。それから一〇年後の大正九年、すでに三七歳となった彼は、精神的に成熟を遂げた人物をある作品の終わりの場面で描いた。ある作品とは、『大阪毎日新聞（夕刊）』に同年一月六日から三月二十八日まで連載された、中編小説『或る男、其姉の死』のことである。タイトルのなかに提示された主人公の「或る男」は、それまで同居していた家族のもとを突如離れて以来、長い間、身内の者たちにとって消息不明な状態が続いていた。しかし、物語の語り手である弟との偶然の再会によって、彼は再び物語の表舞台に立つことになる。九年ぶりに再会した弟によれば、このときの兄の姿は、最後に眼にしたときの容貌とは大きく異なり、穏やかに精神的に落ち着いたものだった。このように内的に成熟した主人公は病床に就く姉を見舞うが、彼女の死を認めると直ちにどこへとも

なく旅立ち、再び姿を消してしまふのだった。こうした結末をもつ作品を書くことは、志賀直哉にとって、どのような事態を意味していたのだろうか。

ところで、志賀直哉は『或る男、其姉の死』について自ら、「書く時は、相当骨が折れたやうに記憶する」(『続創作余談』、『改造』昭13・6)、あるいは「ゆつくりと骨を折つて書いた」(『細川書店版『或る男、其姉の死』あとがき』、昭21・12)などと執筆当時のことを振り返って繰り返し述べたように、執筆にはかなりの労力を必要とした作品だった。そしてこのことはさらに、父・直温との和解という、志賀自身の経験を題材にした『和解』(『黒潮』大6・10)と比較されながら、たとえばつぎのように叙述されている。

「和解」は捕りたての生魚。「ある男、その姉の死」は同じ魚の干物だ。この作品は少し陰気くさくて、愉快な作品でないから、私はあまり愛着をもたないが、書く時は、相当骨が折れたやうに記憶する。好きでなくとも、この作品は私にはやはりなくてはならぬものだと思っている。(『岩波文庫』『大津順吉・和解・ある男、その姉の死』あとがき、岩波文庫、昭35・3)

『和解』は父親との和解の「喜びと興奮」を推進力にして、「十枚平均十五日間」という、彼の作家人生のなかでも記録的なスピードで「一ツ氣に書き上げ」(同前)られた作品だった。それとは対照的に『或る男、其姉の死』は、長い時間を要して苦心の末にようやく完成した労作だった。そうまでして辛抱強く執筆を続け完成に固執した理由は、いま引用した一節のすぐ直前で触れられているが、それによると、「作品としてもっと完全なものにしたかった」からであった。すなわち和解の喜びを執筆の動因とした『和解』では、父子間にあった軋轢それ自体について具体的に描くことは

しなかったが、このことは批評家たちの指摘のとおり、ある意味では『和解』が抱えている欠点にちがいない。そこで『或る男、其姉の死』では不和の実態と要因そのものを克明に書き、そのことで父子の和解をめぐる一連の物語を完結させようとしたのだ、という。

作者本人によるこのような説明は執筆動機として、一見するとしごく妥当なものに思われはするものの、改めて考えてみると、そうすんなりとは納得できない点がある。たとえば、作品の結末で詳しく描かれる、主人公の「姉」の死去という出来事を、われわれはそれでは、どのように受けとめればよいのだろうか。先に引用した文章のなかで志賀は、このことに関して言及してはいない。だが、『或る男、其姉の死』というタイトルそれ自体のなかで特権性を誇示している以上「姉の死」を看過してよいはずはない、ということとは少なくとも言うことができよう。

そればかりではない。『或る男、其姉の死』では、父子の和解は、父親の死去によりついに不成立となるが、このような設定それ自体が、この作品が父子和解の物語である『和解』に接続しないことを、何にもまして正確に語っているように考えられるのである。

このようにしてみると、父子間の軋轢の実態と原因を描くことにより、父子の関係をめぐる一連の物語を完結させることになった、という『或る男、其姉の死』創作の目的について述べた作者自身による解説に引き摺られることなく、「この作品は私にはやはりなくてはならぬものだ」（同前）と述べたことのうちにある意味を、それとは別の観点から探る必要があるだろう。

2

父子の和解をテーマとする『和解』の、その補完としての『或る男、其姉の死』という枠組みをはずすことを検討のための前提として、これまでに稿者は、主人公・芳行の精神的な成熟を示す新たな「眼」の獲得をめぐって、すなわち、家出直前の主人公が見せた「如何にも自信のないオド／＼した眼なざし」から、九年後の「見すばらしい姿、トボ／＼した歩み、そんなものを超えた」、「柔かい、そして温かい感情を含ん」だ「眼なざし」への、そして「死に反抗もしない代り、又それにも決して打ち負かされないやうな眼」（三十七）への変容の問題を中心に二つの論考を試みた。

すでに述べたことなので詳細は省くが、ひとつめの拙論では、作品の創作過程について検討した。すなわち主人公のこのような「眼」の所在は、大正「三年二月十五日」と末尾に執筆年月日が明記された「或る男と其姉の死」を含めて、全部で四種類ある草稿の段階では確認することができず、大正九年一月から三月にかけて『大阪毎日新聞（夕刊）』に連載された現行の作品においてはじめて形象化されたことを明らかにした。¹⁾

もう一編では、こうした「眼」の獲得というかたちで示された主人公の成熟変貌の要因を、両親との関係性のうちに見出した。私見によれば、主人公の内的な成熟には、はじめに父子和解の不可能性を直視しそして承認することが必要であり、こうした断念によって主人公はそれまで捕われていた、自分に対する愛情の所在を父のなかに見出そうとする焦燥から解放されたのだった。そして、父をめぐるこうした強迫観念についての主人公自身による省察は、さらにその奥に潜むもう一つのオブセッションをも浮き彫りにすることを併せて可能にした。すなわち、主人公が了解したのは、父に対する過剰な拘泥は結局、死去という事態そのものによりついに奪われてしまった実母による愛情を、彼女の代わ

りに父に求めようとする代償的な行為にほかならなかったことであり、そしてこのように核には母の愛を強迫的に求める心性が自分にはなお潜んでいたという事実であった。人格的な成熟を意味するあの「眼」は、このように二重のオブセッションからの脱却により得られたものであることを指摘した。²⁾

こうした課題に取り組む一方で、稿者はこれまで、志賀直哉における母と子という課題について重ねて検討を加えてきた。この過程で稿者は、志賀による生母隠蔽の痕跡を、『母の死と新しい母』（『朱槿』明45・2）のなかに確認した。まだ一二歳の少年に過ぎないときに、三三歳という若さで他界した生母の死を志賀直哉が哀惜しなかったはずも、そして在りし日の彼女の幻影に思慕の念を寄せなかったはずも、むろんない。にもかかわらず、彼女の存在をあえて排除隠蔽しなければならなかったのは、彼のなかでなお亡き生母が占有していた場を、新たに迎えることになった継母・浩の手に確実に譲渡し、そのことによって継母が加わった後の新しい家族の世界を再構築しようとしたためであった。この作品を書くことによって志賀が果たそうとしたのは、このようなことであることを指摘した。³⁾

またこうした一連の検討過程で得られたもう一つの結論は、作者自身によって合わせて三編あるとされる「処女作」のうちの一つに数えられた『網走まで』は、そのなかに志賀直哉の生母・銀に対するエロスと禁止双方の要素を見出すことができる点で、母を主題とした志賀直哉文学の原型と見做すことができる作品だ、というものである。同様に委細は避けるが、明治四三年四月に『白樺』創刊号に発表された『網走まで』¹⁾は、大正七年三月刊行の『白樺の森』に収録される際に大幅に手直しされることで、現行のものに最も近いかたちになった。こうして大正七年になって成立した『網走まで』の深層には、「女の人」に魅かれて接近しながらも、しかし最終的には彼女を回避する「自分」の身振りか描かれた、その形象の仕方を通して、生母をめぐる志賀直哉の潜在的な欲望と彼女を排除し消去しようとする働き、つまりエロスと禁止という二つの相反する心の動きを確認することができることを述べた。³⁾

ところで、この「女の人」を回避する「自分」の身振りをめぐっての委細は後述するが、いま述べておきたいのは、このように「女の人」を回避するという消極的な態度をとることで結果的に彼女を網走という地の果てに追放する「自分」を描出したことにより、志賀直哉は『母の死と新しい母』で設置した生母を禁忌とする態度を保持したのだ、というのである。

それでは、『網走まで』の執筆によって志賀直哉の前から再び姿を隠した亡母・銀はその後、どのような運命をたどることになり、志賀はそれとどう向き合うことになるのだろうか。

結論めいたことから先に述べれば、臨終を迎えて床に横たわる『或る男、其姉の死』の「姉」は、青森行き汽車に再び乗車して網走を目指した『網走まで』(『白樺』明43・3)の「女の人」の最期の姿である。そして「姉」の死を見届けた後、どこへとも知れず旅立つ主人公の身振りからは、生母をめぐって織り成された内的な闘争の、志賀直哉におけるひとつの到達点を確認することができると考えられる。

『或る男、其姉の死』について、前稿では先に述べたとおり、主人公の精神的な成熟の度合いを示すあの「眼」のもつ意味とそれを獲得するにいたった経緯について、作品の内側から考察した。そこで本稿では、作品の外側から、すなわち志賀直哉における母と子という一連の課題についてこれまで稿者が行なってきた検討過程を整理しなおしながら、そこに『母の死と新しい母』および『網走まで』以後の作品である『或る男、其姉の死』を位置づけることを目的としている。

『或る男、其姉の死』というタイトルのなかで、主人公の「或る男」、すなわち芳行と並列されてその存在を提示された「姉」、すなわち時子という登場人物は重要である。この姉こそ、志賀直哉における母と子という課題を解くための鍵になりうる人物だからにほかならない。

言うまでもなく、この姉とは別に、作中にはこの物語の語り手で、主人公の異母弟にあたる「私」、すなわち芳三によって「兄の実母」と呼ばれる女性が登場している。この実母はたとえば、「十か十一の時に実母を失った姉はいい人ではあつたが、やはり何処かひねくれた性質を持つてゐたのです」（三、傍点原文）、あるいは「兄は又かなり感傷的な方でした。一つは八つで実母を失つた事が何時までも兄の感傷にからまりついてゐたからでもあつたようです」（七）というように、姉の時子や芳行の性質について語られる文脈のなかなどでいくども顔を出している。したがって、登場人物たちのなかから銀と類似性をもつ人物を探ろうというのであれば、むしろこの「実母」その人に直接照明を当てさえすれば、それで十分な成果を得ることができそうにも思える。

しかしながら、彼女の存在は抽象的で空虚な域にとどまっている、と言うほかない。というよりも、それはそうとどまるように周到に仕組まれている、と言つたほうが適切である。というのは、『母の死と新しい母』において亡き生母の存在を禁忌とした志賀直哉にとって、彼女について真正面から多くを語ることはまさに、あつてはならないことだからである。その点でも、いささか逆説的ではあるが、「兄の実母の事は殆ど知りません」（七）というように、彼女の死去の後に誕生した「私」を語り手とする方法の選択は十分に理にかなつていて、ということが出来る。機能的な限界を

負わされた「私」が語りを担う物語のなかでは、設定上は銀そのままでありながらも、この「実母」は十分に具象化されることは構造的に困難であり、したがって物語世界の後景に退いてしまふほかない虚ろな存在としてとどまらざるをえないのである。

こうした実母に対して、姉の存在は具象的に描出されているが、特徴的なのはその薄幸な人生である。小説の冒頭直後の「二」で、危篤の報を受けて時子のもとへ急ぐ芳三がまず念頭に思い浮かべたのは、「私には自然、不幸だった姉の生涯が考へられます」(二) というように回想した、その不幸せな境遇であった。彼女のそうした人生は、少女時代の「十か十一の時に実母を失った」(三) 経験から幕を開ける。それは母亡き後に期待された「祖母の愛は専ら兄の方に傾いてる」(同) て自分に注がれる余地のなかった非運に連続し、その後の父親との絶縁、そしてその絶縁の発端ともなった、まさにその夫から受ける冷遇にまで連なるものである。

この夫の、妻・時子に対する態度はきわめて冷たく、それは彼女の不幸の大きな要因となっている。たとえば、この夫は、死ぬ身である自分が客用の寝具を汚すのはもったいないことだから、使い古した物と交換してほしいという時子の要望に対して、娘の不賛成を退けて同意するような非情な人物として、あるいは時子の臨終の際に、周囲の誰もが悲しみの涙を流したなかで、ひとり「只良人だけが其中で泣きませんでした」(三十九) というような態度を見せる冷酷な人間として造型されている。

ところで、志賀直哉の父・直温は、妻の銀が死んだ折に涙を流さなかった。祖父と母の間に生まれた子として『暗夜行路』(『改造』大10・1〜昭12・4)の主人公・時任謙作を造型する契機ともなった、いわゆる屋島の空想について言及するくだりで、志賀直哉は「亡くなった母の枕頭で、祖父が『何も本統に楽しいと云ふ事を知らさず、死なしたのは可哀想なことをした』と声を出して泣いた。父は其時泣かなかつた。この印象は後まで私に残つてゐて、父に対する反

感になつてゐた」(『続創作余談』、『改造』昭13・6) というように述べている。このようにしてみると、夫のみが泣かなかつたという『或る男、其姉の死』のなかで描かれた場面は、志賀直哉自身のこのときの経験を素材にしており、したがって夫に冷遇される姉の人物像は銀に由来する、ということが明らかになる。

また、先に少し触れたように、『網走まで』の「女の人」も同様に薄幸な人生を送る妻であり、「自分」の想像によれば、夫に冷遇され虐げられるばかりか、虐待を受けてついに夫によって殺害される女性であった。

このように『或る男、其姉の死』と『網走まで』の二つの作品のなかで、それぞれの夫により不幸にされるそれぞれの妻の人物像は、実際の志賀の父と生母の關係が孕んでいたこうした要素から形成されたものであり、このような観点から実在の人物である銀と、ともに小説の登場人物である時子および「女の人」は重ね合わせるができるように思われる。

4

『或る男、其姉の死』の時子は夫から虐げられる薄幸な女性であるという点で、志賀直哉の生母・銀に通じ、また『網走まで』の「女の人」にも重なることを述べた。つきに、芳行と時子という姉弟の關係について検討してみよう。両者の關係性において特徴的なのは、その絆の神秘性である。

たとえば、父との軋轢が主な原因で家を出て以来、家族には芳行の消息は不明であった。そのために連絡の受けようがまったくなくにもかかわらず、実際に彼は危篤状態にある姉の時子を見舞いに訪ねたのだった。不可思議に思いながらもそこで「私」は、「若し想像が許されるなら、丁度ベツレヘムの星に導かれた東方の学者たちのやうに何百里をへ

だてた所から兄は何かに導かれて、トボく〜と其処へやつて来たのではないか」(一)と考えるにいたる。ここで「私」が、「兄は何かに導かれて」という表現で想定しているのは、たとえば、特定の者たちの間では交信可能な、いわばテレパシーのような超能力のことであるだろう。このような超能力が彼ら姉弟に備わっているとすれば、彼らはある特別な仕方でもともと結び付いていたことになるだろう。

ところで、『或る男、其姉の死』では、血縁ということが重要なテーマとなっている。たとえば、異母弟である「私」は、父・姉・兄の三者の性格が「変に正直」で「同時に頑固」であることに触れるなかで、「私は三人の性格を思ふと、流石に血すぢだと思ひます。よくも共通な物を持つて居るものだと云ふ事を考へさせられます」(四)というように、血統が本来的にもつ力の大きさについて述べている。あるいは鉄道の官有化にもなつて発生した、「賞与金の分配法の問題」(十五)で、その交渉のなかで父に危害が及ぶことを心配する芳行に対して、同様に「私」は、「父にはかなり悪意を感じてゐる最中」でありながら、「それとは全然別な気持で心から父の上を心配してゐたのは流石に肉親の不思議な本能だと云ふ気がし」(十四)たことを述べている。また、主要な登場人物ではない、「私」の甥にあたる正男についてでさえ、「その何となく険しいやうな眼差しが矢張り私共一家の——と云ふより私の父の血をうけて居る事を示して居ました」(三十六)というように、この作品では血縁による結び付きの強固さということを問題にしているのである。

このようにこの物語のなかでは、一族の血をめぐる問題がきわめて重要な要素となっているが、なかでも先に述べた芳行と時子の姉弟間に通うらしい超能力は、両者における血の結び付きが特別であることを示唆している、といつてよいだろう。

それでは姉と弟両者の間に結ばれた絆が特別なのはなぜなのだろうか。それは、彼らが母の血をともに受け継ぐ者た

ちだ、という一点に求めることができるだろう。母の血は、この世で彼らだけに流れているのである。両者の間にテレパシーが働き再会を果たすことができたのも、このことによるのだと考えられる。

5

時子の最期を看取るために芳行と芳三は彼女のもとへとそれぞれに急ぐが、時子がそこで終焉を迎える「信州の或る寒村」(一)とはどのような場なのだろうか。それは、あたかも地の果てでもあるかのように、芳三らが暮らす東京からは大きく隔てられた別世界である。

この村は夫の故郷で、父親の逆鱗に触れて実質的に絶縁された結果、「さう良人から愛されても居なかつた」(二)時子がそれでも身を寄せることになった土地であり、ここで彼女は、夫と二人の子ども、それに姑とともに暮らしている。「上野」(一)から汽車に乗った芳三は、「信州の高原」の「或る停車場」で降りるが、「関東の平野は未だ秋のとり入れて田の面に人々の賑はつて居る時」なのに、ここはすでに「遠い山の頂に薄く雪などの見られる初冬の景色になつて居」(二)ることに驚かされる。しかし、時子の住む寒村はこの停車場からまだずっと先で、「尚十里余り奥へ入つて行かなければならぬ」(同)い。そこで芳三は、「余り喜ばない車夫に金を余計にやつて漸くそれから五里ある或る村まで」「襟を立てた外套の中で寒さに身を堅くしながら」(同)夜道を俥に揺られて行く。その村の「旅人宿」に到着したのは夜の「九時少し過ぎ」で、そこで一泊し、朝食を済ませて再び俥に乗るが、俥では「四里半」ほどしか行くことができず、残りの「三里余り」は「田も畑も林もない本統の高原になるので」、「新しく雇つた人夫に荷物を背負はせて」(三十五)徒歩で行かなければならない。この高原の荒廃した道なき道を歩きながら、「大雨の後は一時に其総てに水が奔

流する」、その「有様を想像すると、何だか夢の中に出て来さうな景色が想はれ」(同)るのだった。「日が入ると、急にさむくな」ったそのころ、ようやく目的地である「小さい山の麓で五六軒の農家で出来た寒村」(三十六)に到着する。こうして長い行程を進んだ果てに、時子の暮らすその寂れた村はあった。

乗車駅の上野や窓外に広がっていた関東平野とは大きく隔絶した寒村の民家の一室で、時子は「仰向けに眼をつぶつて寝てゐる」(三十七)た。彼女の姿を眼にして芳三は、「掛けた蒲団が薄い所に身体も骨と皮ばかりになつてゐる為か、上が平べつたく低く見えてゐるのが、一寸死人が寝てゐる時のやうな気が」(三十七)する。

兄は傍へ座つて黙つてその顔を覗き込んでゐましたが、姉にはまるで意識はない風でした。落ち窪んだ眼や、半分は垢かと思ふ色艶の悪いカサ／＼した皮膚とかを見ると私は堪らない気持になりました。(中略)死んで了へばどういふ死も結局は同じであるとしても、此場合すすけた変に広い部屋に暗い釣洋燈が一つ、そして見るもの何一つ華やかな色もなく、姑と良人との心持にももう色も温かみもないやうな感じから、私には此光景が既に黄泉のやうに感じられたのです。(三十七)

「此光景が既に黄泉のやうに感じられた」という箇所に注目したい。先に引用したように、荒涼とした高原を通過しながら芳三は、非現実的な「夢の中に出て来さうな景色」を思い浮かべていたのだが、漸く時子との再会を果たしたその場所はすでに、死後の世界そのものであった。

このように姉の横たわる部屋を黄泉であるかのように感じたのは芳三であるが、この黄泉の世界で時子が真に待っていたのはその芳三ではなく、芳行であるのはいうまでもない。それは、芳行こそ同じ母の血を引くただ一人の肉親だから

らにほかならない。その同じ血を共有するがゆえに自分たち姉弟のみに付与された「超能力」を用いて、彼女は消息不明なはずの芳行を最期の面会のために呼び寄せ、そして彼の到着を待って「一週間つぶり続けた落窪んだ眼をパッチリと開」(三十八) いてそれを果たしたのだろう。

ところで、『網走まで』の「女の人」が向かう「網走」とは、「自分」の想像のなかで、彼女が虐待を受けた果てに死にいたる、いわば黄泉の世界である、という私見についてはすでに述べた。ともに幸薄いという点で「女の人」と時子が重なり合う存在であるとすれば、黄泉としての網走を目指して列車に揺られた「女の人」は、時子という人物に姿を変えて、最終的に黄泉としてのこの寒村でその生涯を閉じようとしているのだ、と考えることはできないだろうか。

そしてさらには、末期の床に就いた時子が「女の人」の最期の姿であるとすれば、ここで時子が再会を期して待っていたのは、「女の人」を黄泉に送り込んだ主人公の「自分」、すなわちそのモデルである、「或時東北線を一人で帰つて来る列車」(『創作余談』、『改造』昭3・7)に乗っていた志賀直哉自身、そして『或る男、其姉の死』の主人公の「或る男」(芳行)だった、というように考えることはできないだろうか。

6

終焉を迎えようとしていた時子は、同じ母の血を引く唯一の肉親である芳行を呼び寄せた。その要請に応えて芳行もまた、同じ血をもつただ一人の姉を訪ねた。このとき注意しなければならないのは、姉との再会を果たした芳行が大きな変貌を遂げていたこと、そして姉を訪ねるといふ行為が自らの意志によるものであったということである。

家を飛び出して以来ずっと消息不明だった芳行が、九年ぶりに芳三の前に姿を現したとき、芳三が驚かないではい

れないほど、彼ははなはだしくその姿を変えていた。それは単に九年間という年月が人にもたらすのとは別種の明らかに質的な変化であり、精神的にも落ち着いたその成熟ぶりは顕著だった。たとえば、薄暗い部屋のなかで芳三は、昏睡状態に陥ってひどく衰弱してしまった姉を前にして、「死の恐ろしさ」を覚えて怯えているのに対し、繰り返し引用することになるが、芳行は「死に反抗もしない代り、又それにも決して打ち負かされないやうな眼」で姉を見つめながら、「現在私がすっかり捲込まれて居る其気分には少しも捲込まれずに居る」(三十七)のだった。しかし、それはたとえば彼女の夫のように、単に冷淡な気持ちの表れというのではむろんない。この夫とは異なって時子の臨終に際しては、文字どおり涙を見せているからである。

このように芳行はある成熟を遂げた人物として、死に逝く時子を送っているが、それに対して『網走まで』の「女人」に対する主人公の送り方は、大きく違っていた。

その送り方、すなわち先にも少し触れた、「女人」を回避する「自分」の身振りという点に関してやや詳しく述べておこう。「女人」が赴く「網走」とは、「自分」の想像によれば、虐待後に死を迎えることになる土地であった。車中で苦心の末に漸く書き上げた葉書の宛先や内容が、彼女の悲運なこの網走行きと無関係であるはずはない。このことに気付かないはずはないにもかかわらず、一方では確かに彼女に同情的な「自分」がそれでもあえて郵便ポストに「名宛を上にして(中略)投げ入れ」るのは、彼女の存在を退け、そして間接的に網走⇨黄泉へと葬送するためである。それが「間接的」であるのは、このまま彼女の網走行きを傍観すれば、彼の想像では彼女は夫あるいは息子によって殺害される以上、結果的に見殺しにしたことになるからである。しかし、この男の子が結局は「自分」自身の鏡像にほかならないとすれば、そしてさらには「自分」の深層意識および無意識が、「女人」が男の子や夫に殺害される結末を「自分」自身に想像させるという搦手を巧妙にも用いたとすれば、彼女を網走⇨黄泉へと導くのは、結局は主人公であ

る「自分」以外の何者でもないということになるのである。

このように消極的な方法による葬送の仕方にくらべると、『或る男、其姉の死』の主人公自らが姉の終焉の地である寒村に赴き、そして死に逝く姉を温かくしかも泰然と見送るその態度は、明らかに主体的で成熟したものであるということが出来る。

そして、このような「或る男」を作品の主人公に据えた志賀直哉もまた、あるかたちで成熟を遂げていたのだということができよう。すなわちこれまでの志賀は、『母の死と新しい母』において生母の存在を強行的に追放しようとし、つぎの『網走まで』ではそのためにかえって強迫的に生母へのエロスを求めないではいられず、だからこそまたこの『網走まで』では同時に、さらに厳しく亡母の幻影を封じ込めなければならなかった。こうした生母をめぐる禁止とエロスの葛藤の劇を激しく演じてきた志賀にとって、『或る男、其姉の死』の執筆はこの主題をめぐる大きな到達点であった、ということができよう。

すでに死去した生母・銀との関わりをめぐる志賀直哉の成熟の痕跡は、生母の血を受け継いだ唯一の肉親である姉・時子のもとを自ら訪ね、そして彼女の死を受け入れた後、主人公・芳行がおそらく他者を求めての新たな旅へと一歩を踏み出すという末尾をもつ『或る男、其姉の死』のなかに認めることができる。ただし、銀をめぐる志賀直哉の成熟は、すでに述べたように、「実母」その人を通してではなく、「姉」という別の人物に変形したうえでしか表現しえないような容易ならぬ事態であったこともまた、併せて記しておかなければならない。

注

- (一) 拙稿「志賀直哉『或る男、其姉の死』論——草稿類との比較を通して——」(『明治大学教養論集』通巻三七七号、二〇〇四・一) 参照。

(2) 拙稿「志賀直哉『或る男、其姉の死』論——主人公の変貌をめぐって——」(『明治大学教養論集』通卷四〇四号、二〇〇六・

三) 参照。

(3) 拙稿「『母の死と新しい母』のたくらみ——実母の追放と新たな母子神話の創造——」(『日本文学』第四三卷第一号、一九九

四・一) 参照。

(4) たとえば、志賀直哉は「細川書店版『網走まで』あとがき(昭22・7)のなかで、『菜の花と小娘』、『或る朝』、『網走まで』の三編それぞれについて簡略に解説したうえで、「私には色々な意味での三つの処女作があるわけだと考えてゐる」と述べている。

(5) 拙稿「志賀直哉における欲望と禁止——『母の死と新しい母』以後の精神風景——」(『明治大学教養論集』通卷三七四号、二〇〇三・九) 参照。

(とみざわ・しげみ 政治経済学部助教授)